

教務主任として・演劇部顧問として

福島県立福島南高等学校

教諭 西田 直人

I 福島南高等学校について

本校は昭和 62 年の創立以来、国際化の進展と情報化社会の高度化に対応できる広い視野に立ち、豊かな心を持つ人間の育成を目指して、文理科・国際文化科・情報会計科の 3 つの専門学科の特色を生かした教育活動を展開し、生徒の進路実現に努めている。令和 6 年で創立 38 年を迎え、各学年文理科 2 クラス、国際文化科 1 クラス、情報会計科 1 クラス、全校生約 480 名の全日制専門高校である。生徒の進路先は大学・短大が約 70%、専門学校約 15%、公務員を含む就職が約 15%と多岐にわたっている「キャリア指導推進校」である。生徒は進路実現のため 5 教科を中心とした平常及び長期休業中の課外、各種資格取得のために放課後の課外等に励んでいる。また、定時制(夕間部・夜間部)のふくしま新世高校と校舎・施設を共有している。

II 教務主任として

1 はじめに

私が教務主任を務めた 4 年間(令和 2 年度～5 年度)は、現行入試 2 年目、新学習指導要領に基づく新教育課程編成、新型コロナ・ウイルス対応、観点別評価導入といった、学校として大きな課題が続いた時期であった。現在、いずれも施行期に入っているため、諸課題への対応の内容には踏み込まず、対応の際心がけたことを記す。

2 こころがけたこと

(1)委員会、会議を通じて“自分ごと”にしてもらう

本校は、ステージⅢに該当する経験ある教員が大半を占め、通常業務においては細かい指示がなくても、それまでの経験を活かし各種業務をスムーズに進めている。反面、新しいものを導入する際は、経験がある故に反発等が見られることもある。教務提出書類は表や数字が多く並び分量も多いため、教育課程編成、観点別評価導入の際は、そうした傾向に対して、委員会・会議を通じて課題を“自分ごと”にしてもらう仕掛けを意識した。一方的に資料を提示し、読み込む時間も考える時間もない、“協議”でなく“連絡”で終わらせることを避け、提案者である私から「この点が疑問だ」「ここが納得できない」等と問題点や課題を投げかけ議論を誘発するようにした。そうしたポイントを作ることで、先生方は課題を“自分ごと”として考える様になり、発言も増え会議は活性化する。こうして、教育課程編成、観点別評価導入に対して課題意識を持ち、自ら参画している意識を涵養することで、教員の中に“自分ごと”の意識が生まれる。委員会や会議の時間や回数は多くなるが、それらを経た結果、導入自体はスムーズに進んだ。

(2) 他校比較によって同意形成を図る

教育課程編成においては、大学進学を主とする学校、学科では、5教科の単位の“取り合い”に陥るケースが多いのは当然である。一時的な発言や委員会での議論のみに基づいては、勢いに押し切られたり、事実の誤認等も生まれる。そうした問題には、「新任教務主任研修」で知り合った他校教務主任と連絡を取り、互いの教育課程表を参照し合い、考えを広げた。もちろん、教育課程編成はその学校の目標に基づきその学校で編成するものだが、議論に対する視野や原案に対する理解を広げることに、大いに役立った。

3 おわりに

私と同じ時期に教務主任を務めていた方は皆、同じ業務に取り組んでおり、私だけが目新しい仕事をした訳ではない。僭越ながら、そうした方々の代表として、当時心掛けていたことの一部を書いてみた。

Ⅲ 演劇部顧問として

1 はじめに

「演劇」と聞いて抱くイメージに反して、演劇部に入る生徒のほとんどは、中学校の部活動があまりうまくいかず（うまくいった生徒は同じ部活動が続けるだろう）、高校で何か新しいものに挑戦しようと考えている生徒である。どちらかというと内向的で合ったり社会性に欠ける生徒が多い。私の演劇部指導の目標は、そんな挫折を抱えた生徒たちに自己肯定感、社会性、表現力を伸ばしてもらうことである。

2 取組

部活動指導の際、留意していることは、以下の点である。

(1) 発言機会の確保

とにかく全員に、できるだけ多くの発言機会を作る。日々の練習の終わり、通し稽古終了直後、作品鑑賞をした直後等に、必ず全員に意見・感想を述べる機会を作る。ありきたりな感想、体裁を取り繕った感想、質問とズレた発言に対してはその旨を指導する。生徒たちは「もっと語彙力がほしい」と、自分の想いを言葉にすることに苦しみながら発言するが、半年も経つと、意見を表明する楽しさを感じ始め、こちらから「少し短めに」と指導するくらい長く話す様になる。「言葉による表現」の力が大きく伸長する。ある程度力がついて来たと判断したら、感想会をフリートーク制に変えていく。ここでは、自分の表現だけでなく、話し合いの流れを見ながら発言することを意識させる。こうした（言ってみれば）平凡な機会を繰り返すことで、表現力の伸長と自己肯定感の伸長に繋がる。

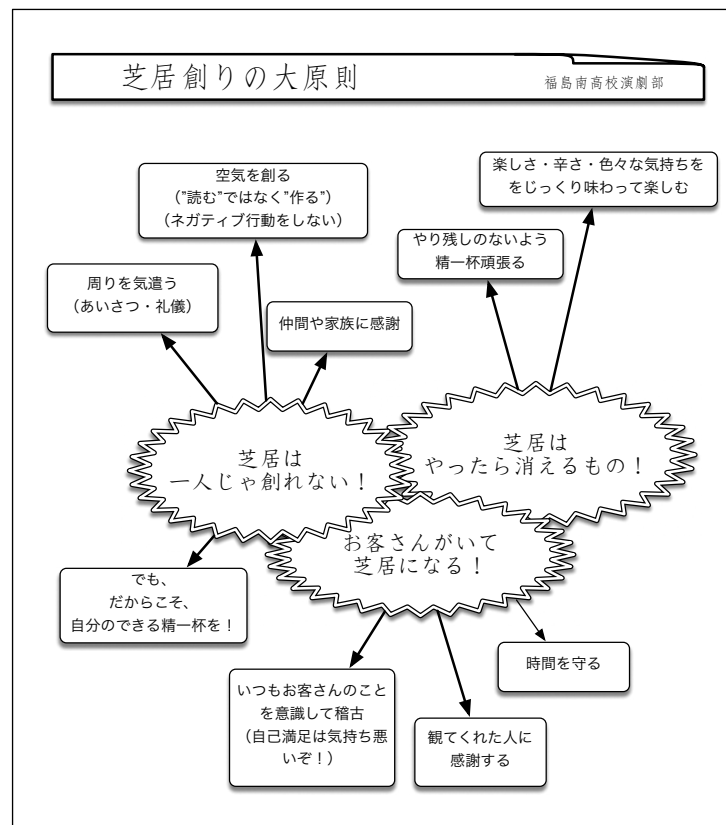
(2) 社会性の向上

右の図は、部活動編成時に配布する書類の一つである。演劇の特性を3つに分け、そこから派生する必要な姿勢、態度を書き出した図である。演劇を創る中で、様々な場面でこの図に立ち返り指導することで、生徒たちは部活動の中での自らの体験に学び、社会性を伸ばしていく。

(3) 自己肯定感の向上

様々な場面で「できたこと」と「改善してほしいこと」を指摘する。演劇創りは、どこまでやっても満足な終わりのない作業であるため、顧問の立場から「できたこと」をしっかりと指

摘し、生徒が、以前の自分よりも力を伸ばしていることを自覚できるように指導する。同時に「改善してほしいこと」も随時伝える。生徒と芝居創りの時間を共有する中で、(顧問という立場で)可能な限り本音で伝える。なお、これらの指摘が説得力を持つためには、生徒と芝居創りの多くの時間を共にする必要があると感じている。



3 “勝負” ではない

コンクールに出場し上位大会に進むことは、生徒の自己肯定感を育てるためにはとても有効な経験であるため、できる限り上位大会は目指している。しかし運動部と違って、演劇は本質的に「試合」ではない。私たちは他校の作品と“闘って”はいない。互いに上演し、それを鑑賞し合っているだけである。審査員による選考は、あるレベルに到達すれば審査員の見方に左右されるし、その大会でのラインナップや社会状況にも左右される。それゆえ演劇コンクールに「勝った」「勝ち取った」という表現はふさわしくないと考える。ある条件の中で「いただいた」「選ばれた」ものであることを忘れず参加するようにしている。

4 顧問創作について

高校演劇の作品区分は脚本の種類で行われ、顧問創作、生徒創作、既成に分けられる。プロの書いた既成脚本と顧問が書いた脚本、生徒が書いた脚本が同列に審査されるのが高校演劇の特徴である。高校演劇界限では時折「顧問が脚本を書くのはおかしい」と言った声が

あがる。「高校生の大会なのだから、高校生が脚本を書くべきだ」というのだ。「高校生以外、書くべきでない」という極端な意見もある。高校演劇は当然、教育活動の範疇にある訳で、顧問が書くことによって、生徒の学びの目標を設定しやすい面がある。社会問題や歴史問題等を題材にした時はなおさらである。（もちろん、生徒がそうした題材を執筆する場合もある）教育的な意図を持って活動するには、顧問の視点＝顧問創作は意義が大きい。

私は、

- ①「今、この時代」にやるべき作品
- ①「今、ここにいる部員たち」が映える作品
- ③自分が描きたい作品

（※数字は優先順位で①が2つ）

この3つを充たす物語の題材を日々探している。

5 さいごに

演劇的手法を用いた教育の効果が評価されている。演劇部の活動においても、顧問からはよく「演劇を通して生徒が変わる、生徒が成長する」と聞く。全く同感であるが、「変わる、成長する」を、もう少し具体的に区分し、1であげた自己肯定感、社会性、表現力の向上に留意して、今後も演劇部指導にあたっていきたい。